
Mimic

雪場寛太

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

M i m i c

【Nコード】

N 0 4 7 4 A

【作者名】

雪場寛太

【あらすじ】

服部の前に突然現れた名古屋の探偵を名乗る明智という青年。二人はすぐに意気投合するものの……。

FILE 1 プロローグ

身を切る様な寒さの冬のある快晴の日、1人の眼鏡をかけた高校生ぐらいの少年が改方学園の前に立っていた。

青年：「ここが改方学園ですか…。」

その頃、体育館の横の自動販売機では、服部平次が剣道の練習を終え、一息ついてるところだった。
そこへ、同じ剣道部員の1年生が走ってやってきた。

1年生：「服部先輩、大変や！」

平次：「なんや息切らせて。誰か怪我でもしよったんか。」

1年：「せやないけど…。なんか服部先輩と勝負したい、ゆーやつが来よったんや。」

平次：「なんやて？ わかった、すぐ行くわ。」

平次が剣道場に着くと、そいつは正座して平次を待っていた。

眼鏡の奥から人好きのしそうで、それでいてどこことなく鋭い感じの

する目が真っ直ぐに平次をとらえ、少し長めの髪は銀色をしている。
なかなかの切れ者のような印象を受けた。

青年：「初めまして。突然すみません。私、名古屋から来ました明智耕介といます。」

平次：「ああ。オレは服部平次や。試合やる？ほな、早よ始めよか。」

明智：「お願いします。」

平次：「（なんやコイツ、なんでオレに試合申し込みよったんかいな…まあ、オレもそこまで有名になったっちゅうことかな。）」

パシィッ！パシィッ！ 激しい打ち合いが始まった。明智も相当の腕前なのだろう。服部相手に互角の試合をしている。

先に勝負にでたのは服部だった。

平次：「胴ー！」

明智：「（隙あり！）面ー！」

パシィィッ！

.....。
静寂が辺りを包む。

平次：「えっ……オレが…負けた？嘘やろ？このオレが…。」

呆然としている服部に明智が声をかける

明智：「…服部さん、よければもう1試合お手合わせ願えませんか。」

平次：「えっ……。おまえ勝ったんやぞ？ええんか？」

思いがけない言葉に驚く。

明智：「はい、お願いします。」

二試合目は激しい応酬の末、服部が勝った。服部は最初負けたものの、スポーツマンの性なのだろう、沖田のほかにもう1人真剣に闘える相手に出会えたことが、彼の心を不思議と澄んだものにした。いた。

試合終了後、服部が汗を拭きながら明智に、

平次：「お前変なやつやな、勝ったのに二回目の勝負申し込みよるなんて。」

明智：「よく言われますよ。それより、まだ練習するんですか？」

平次：「いや、今日はもう終わりのつもりやけど、なんでや？」

明智：「いえ、もし暇だったら、喫茶店でも行って西の名探偵の話でも聞きたいなって思いました。」

平次：「ああ、ええけど。それより…、西の名探偵の話聞きたいなんて、お前普通の高校生とちゃうやろ。」

明智：「わかりました？実は私もあっちでは少しは名の通った探偵なんですよ。」

平次：「なんや、お前も探偵やったんか。どーりであんな目しとつたわけやな。」

そこへ、平次の練習が終わるのを待っていた和葉が道場の入口まで迎えに来た。

和葉：「へいじー！いつまで待たせる気なん？…（えっ）……そっ

ちの人…誰なん？」

平次：「ああ、こいつは名古屋から来よった明智ちゅうやつや。コイツも探偵なんや。」

明智：「どうもよろしく。あなたは？」

和葉：「ア、アタシは、と、遠山和葉つていいいます。よ、よろしくね。」

「（なんなんこの人……。なんか…めっちゃ緊張するわ。）」

平次：「（なんやコイツ…。顔真つ赤やぞ。熱でもあるんかいな。）」

明智：「じゃあ服部君、そろそろ行きましようか。もちろん遠山さんも来てくれますよね。」

平次：「えっ、こんなんも連れてくんか？」

和葉：「（ギロツ）へいじー？なんかゆーた？」

平次：「いえ…なんでもないです…。」

喫茶店に着き、平次、明智の2人は、探偵、剣道といった共通点もあって、すぐに打ち解け、楽しそうに話をしている。一方、1人話

の輪に入ることのできない和葉。もちろん和葉は平次以上におしゃべりなのだが、その時は自分から話に入っていくことができなかった。

そうして和葉が一人うつむきながら紅茶を飲んでいると、不意に明智から声をかけられた。

明智：「あの、遠山さん、服部君と遠山さんってどんな関係なんですか？」

和葉：「どんな関係って…。平次とはただの幼馴染なんよ。」

明智：「ふーん。幼馴染かあ。」

明智：「そうそう、服部君、服部君は誰が好きなんですか？」

和葉：「（えっ）」

平次：「誰が好きって…。オレはなあ……………」

和葉：「（平次……………。）」

平次：「オレはやっぱりエラリー・クイーンやな。」

和葉：「へっ？」

明智：「へえ、エラリー・クイーンですか。私はアガサ・クリステイですね。」

和葉：「（なんや、推理作家の話なんか。期待して損したわ。せやけど…。）」

明智：「遠山さんは誰が好みですか？」

和葉：「（わざわざ『遠山さん』言わんでもええのに…）え？推理作家？」

明智：「はい。」

和葉：「アタシはねえ…。」

平次：「和葉は推理小説なんか読んだことないやろ。」

和葉：「余計なお世話や。うちだって推理小説ぐらい読んだことあるわ。」

「（ええっと、うちが好きなんは西村京太郎なんやけど、ここは平次と明智君に合わせて外人の作家で…。そや、そういえば蘭ちゃんに似た名前の作家おったなあ。なんやったつけ…。あ、思い出したわ！）」

「アタシが好きなんは、モーリス・ルブランなんよ。」

明智：「ルパンですか。私もよく読みますよ。特に『水晶の栓』なんか最高ですね。」

和葉：「（へえ、ルパン書いてはる人やったんか。知らんかったわ。）」

平次：「（あれ、和葉、ルパンなんて読んどったつけ。まあ、ええか。）」

その後、話題は別の方向へ逸れていったが、平次に加えて和葉まで話し始めた。間違いなく今日一番うるさいお客達だったことだろう。

和葉：「そ、それより明智さん、」

明智：「呼び捨てでいいですよ。」

和葉：「ええっと、今日はどっかに泊まりはるんですか？」

明智：「いえ、7時に新幹線で帰るつもりですが。8時過ぎには名古屋に着いていたいんで。」

平次：「ほんまか？もう6時40分やぞ！急いで出らんと、こっから駅まで30分はかかるで！」

明智が慌てて時計を覗く。

明智：「えっ！本当だ！じゃ、じゃあさようならっ！」

鞆を掴むと、慌てて出て行く明智。明智を見送りながら――

平次：「冷静なんかおっちょこちょいなんか、わからんやつやなあ。

」

和葉：「でも、ええ人そうやん。」

平次：「そっぴや和葉、今日お前はじめ全然しゃべらへんかったなあ。いっつも最初っからうるさいぐらいよーけしゃべりよるのに…。なんかあつたんか？」

和葉：「べ…べつに…なんもあらへんよ。」

平次：「それならええねんけどな。」

FILE 1 プロローグ（後書き）

はじめまして、雪場と申します。小説を書くこと自体初挑戦なので、目も当てられないほどの駄文・駄作ですが、どうぞよろしくお願いします。

FILE 2 転校生

次の日、いつも通りに登校した和葉と平次。しかし、明らかに教室の雰囲気が違う。落ち着かないというか、ざわついた雰囲気だったのだ。

そこに和葉の友人の彩花が駆け寄ってくる。

和葉：「なんかあつたん？」

彩花：「和葉、転入生や！転入生が来るらしいで。」

和葉：「ほんまなん？」

彩花：「嘘ゆーてどないすんの？それよりその転入生、えらい男前らしいで。」

和葉：「男前って…。まさか彩花、またねらつとんの？」

彩花：「あたりまえや！和葉も早ええ男……あつ、和葉ちゃんには服部君がおるんやっただね。」

和葉：「せやから平次はただの幼馴染やゆーとるやん！」

彩花：「あれ？そうやったつけ？あ、先生来たわ。じゃあまた後でね。」

和葉：「もう…。いっつもあなんやから…。」

先生が入ってくる。

先生：「もうみんな知っていると思うが、今日から新しく転入生がこのクラスに入ってくることになった。」

先生、ドアの外を見て

先生：「入ってきなさい。」
転入生が入ってくる。

明智：「名古屋の兼田第一高校から来ました、明智耕介といいます。」

平次・和葉：「ええーっ！」

その日の授業後、和葉はいつものように服部の練習が終わるまで時間を潰すために図書室に来ていた。図書室のドア越しに中を見ると、机に向かってノートパソコンを開いている明智の姿が。

和葉：「（何やつとるんやろ？えらい気になるなあ…。よし、思い切って声かけてみよう。）」

和葉：「何してんの？」

明智：「ああ、これは事件のデータの整理。ところで和葉さん、服部は？」

和葉：「平次は剣道の練習。平次になんか用なん？」

明智：「いや、校内を案内してもらおうかなーって思って。でも今日も練習中なら仕方ないですね。」

和葉：「ああ…せやったら…アタシが案内しようか？」

明智：「あ…いいんですか？」

和葉：「全然かまへんて！ほな、ついて来て。」

校内をひと通り案内し終わって、最後に二人がやって来た3F廊下。

和葉：「ええっと、こっちが資料室で、つきあたりが保健室な。」

…………返事がない

和葉「??」

和葉、後ろを振り返ってみるが、誰もいない。

和葉：「明智くん！」

「（あれ、明智君どこ行ってもうたんやろ？とりあえずその辺探してみよ。）」

資料室、保健室、実験室など3階のほとんどの教室を探してみるがどこにも明智の姿はない。

和葉：「（あと3階はこの理科準備室だけや…。）」

ガラガラガラッ

和葉がゆっくりとドアを開ける。

和葉：「明智君…おるー？」

「（暗くてよー見えへんなあ。）」

その時、和葉は『何か』につまずいた。和葉はつまずいたことに気がつかなかったのだが、つまずいた『何か』が倒れて和葉にぶつかった。

和葉：「痛っ！なんなんこのぶつかってきたもんは？」

暗い中よく目を凝らしてみると、理科準備室にあるお約束のもの、そう人体模型、それも頭だけだった。

和葉：「いやああああ！！！！」

その絶叫を聞いて2Fから走って上がって来たのは明智耕介。全力で走って理科準備室まであと5m、しかしその時足が滑って転倒。理科準備室にはヘッドスライディングで到着。

和葉：「明智君…大丈夫なん？」

明智：「それより和葉さん、何があつたんですか！」

和葉：「ああ…全然たいしたことあらへんから。気にせんどいて。」

明智：「でもさつきものすごい悲鳴が…。」

和葉：「あ、そんなことよりもう平次の練習終わつとるわ！早よ教室行かへんと！」

明智：「は…はあ。」

和葉：「（あーあ、明智君にかっこ悪いところ見られてもうたなあ。）
」

教室に着くともう服部が暇そうに待っていた。

平次：「えらい遅かったなあ。なにやつとつたん？」

和葉：「ちよつと明智君に校内を案内しとつたんよ。」

平次：「さやか。ほな3人そろつたことやし、帰るか。」

帰り道

平次：「明智、おまえなんで転校してきたん？それも今日金曜日やで。普通日曜か土曜に引っ越しして、月曜から学校に来るんとちゃう？。」

明智：「いや、ちょっと親の仕事の関係で。それに昨日のこともありましたし、ほら、『思い立ったが吉日』って言っじゃありませんか。」

平次：「『思い立ったが吉日』、っておまえそんなに急いで引っ越ししてきたんか？」

明智：「まあまあ、細かいことは気にしない、気にしない。」

平次：「（やっぱコイツどっか変やわ！）」

平次：「ああ、それより、今日うち来ーへんか？」

明智：「いいですけど…どうして急に？」

平次：「いや、昨日うちのオカンにお前のこと話したらな、『次こっち来たら1回うちに来てもらいなさい。』ってゆーとったんや。和葉も来るやろ？」

和葉：「……アタシはやめとくわ。今日ちょっと忙しいねん。」

いつもと違う和葉の態度を、平次が見逃すはずもなかった。

平次：「さよか……。忙しいんらしゃあないな。」

明智：「それじゃあ、服部。1回帰ってから後で行きますから。」

平次：「おう。またなー。」

明智が完全に見えなくなったのを確認してから平次が気になっていたことをぶつける。

平次：「和葉……。おまえ、明智のこと気しとるんやろ。」

和葉：「なに急に言い出すん？全然ちゃうつて。」

和葉が作り笑いで答える。

平次：「なあ和葉。オレにはほんとの事いえや。おまえの態度見とつたらよーわかるわ。」

和葉：「……………」。

平次：「なあ……和葉。」

和葉：「……………ちやうよ。……………そんなんやないって。……………
ほな、アタシ用事あるから……………」

そう言つと和葉は、服部を置いて走り出した。

平次：「ちよ、ちよー待てや和葉！」

服部が呼び止めるが、和葉は振り向くことなく行ってしまった。

平次：「（和葉……………」

さて、こちらは走つて家までたどり着いた和葉。

和葉：「（また平次に嘘ついてもうた…。平次は悪ないのに…。それについて…ほんまに明智君のこと…せやけど平次には言えへんし…。」

落ち込んだ気分のまま自分のベッドに倒れこむと、そのまま眠ってしまった。

FILE 2 転校生（後書き）

どうも、相変わらずの駄文ですが読んでくださってありがとうございます。
います。さて、そろそろ舞台も大阪から移動していきそうな予感が
…。（↑早っ！）こんな小説ですが、感想やアドバイスなんかいた
だけるとありがたいです。どうぞよろしく。

FILE 3 東京へ！

服部の家

『ピンポン』

ドアのチャイムが鳴る

平次：「おつ、やっと来よったか。」

予定より30分遅れてきた明智に不満そうな顔をしながら、平次がドアを開ける。

平次：「えらい遅かったな。」

明智：「ごめんごめん。ちょっと迷っちゃって。」

平次：「せやから、迎えに行っただろ、言っただのに…。まあええやとりあえずあがってや。」

明智：「おじゃまします。」

平次の部屋

剣道の話、地元の話、事件の話…尽きることのない話の中で、平次はあることを思い出した。

平次：「なあ、おまえが集めとるゆーとった事件のデータ見せてくれへん？」

明智：「あ、いいですよ。」

明智が急いでノートパソコンを立ち上げる。

明智：「ほら。ちゃんと服部が解決した事件も記録してあるでしょ？
それだけじゃないですよ、このパソコンにはあらゆる事件や犯罪組織だけでなく、探偵、警察官のデータまであるんですよ。」

たしかに、ありとあらゆる人物のデータが入っているようだった。
もちろんその中には、一流の高校生探偵の平次や新一の名前もあった。

平次：「しかしよーけ集めよったなあ。どっからこないぎよーさん
情報集めてくるん？」

明智はニヤツと笑って口の前で指を振りながらこう言った。

明智：「それは企業秘密。」

平次：「なんやそれ！おしえんかい明智！」

.....

そのころ、和葉の部屋

ようやく目が覚めた和葉。

気分の重かったのは疲れていたせいもあったのだろう、一眠りすると、少し気が楽になっていた。

和葉：「あ……アタシ眠ってもうとったんか……。ふう、これからどな

いしょ…。せや、蘭ちゃんに相談してみよ。」

机の上からケータイを取ると、ボタンを押した。

P r r r r、P r r r r、P r r r r

蘭：『はい、もしもし。』

和葉：「蘭ちゃん？アタシやけど。」

蘭：『あ、和葉ちゃん。どうしたの？』

和葉：「あのな、蘭ちゃん、アタシ……………平次のほかに好きな人で
きてもうたんや。」

蘭：『えっ…。』

和葉：「なあ蘭ちゃん、アタシこれからどないしたらええねんやろ
…。」

蘭：『……………。』

しばらくの沈黙の後、もう聞きなれた声が聞こえてきた。

『ねえ…和葉ちゃん、和葉ちゃんはその人のこと、本当に好きなん
でしょ？』

和葉：「うん…。せやねんけど…。」

蘭：『本当に好きなんなら、自分の気持ちにうそをついちゃだめだよ。』

和葉ちゃんを選んだ人だったら、きっといい人だと思うし、それに…好きな人がそばにいてくれることって本当に幸せなことなんだからね。そのことは忘れちゃだめよ。』

和葉：「（せや、工藤君は今、蘭ちゃんのそばにおらへんのやったな…）ごめんね、蘭ちゃん。」

蘭：『ううん、いいの。だって…新一、なんか近くにいそうな気がするから。』

それより和葉ちゃん、落ち込んでちゃだめだよ。和葉ちゃん笑ってる顔が一番かわいいんだから。

たぶん服部君もその人も明るい和葉ちゃんのほうが好きだと思うから。』

和葉：「せやね蘭ちゃん。元気出てきたわ。おおきに。」

蘭：『またいつでも電話して。私でよければ相談にのるから。じゃあね。』

ピッ

和葉：「（やっぱり蘭ちゃんは強い人やわ…。好きな人が近くにおらへんでもあんだけ明るくふるまっとる…。」

よし、アタシももっと元気出さなあかな。）」

再び平次の部屋

明智：「ねえ服部、服部って工藤新一、知ってますか。」

平次：「ああ、知ってるで。あいつもオレの親友やからな。」

明智：「じゃあ今どこにいるか知ってますか？」

平次：「えっ…なんでそんなこと聞くん？」

明智：「だって1回くらい会ってみたいじゃないですか。なんていったって東の名探偵ですよ。」

平次：「せやな…でも工藤、今行方不明なんや。オレもどこにおるか知らんねん。」

明智：「やっぱりそうですか…。」

残念そうにうつむく明智

平次：「（あいつにも会わせてやりたいけど、こればかりはなあ。オレ1人で決めれることちゃうし…まあとりあえずおっちゃんに会わす、ゆーてあっちまで連れてったるか。）」

平次：「なあ明智、工藤のおるところは知らへんけど、毛利小五郎のおるところやったら知つとるで。行ってみらへんか？」

明智が顔を上げた。

その目は、新しい希望に輝いていた。よっぽどうれしいのだろう、と平次は思った。

明智：「そうですね。毛利小五郎も名探偵ですしね。じゃあ明日にでも行きますか。」

平次：「せやな。ちよつと急やけど、早いほうがええやろな。そんならオレちよつとあつちに電話してくるわ。」

明智：「あ、電話私がやりますよ。一番会いたがっているのは私ですから。」

平次：「そうか？ほんなら頼むわ。」

明智：「あつちつて誰がいますか？」

平次：「えつとな…蘭つてゆうねーちゃんと、おっちゃんとコナンつちゅうボウズの3人や。せやけど、聞いてどないすん？」

明智：「それは後でのお楽しみ。」

P r r r r、P r r r r、P r r r r

蘭：『はい、毛利探偵事務所です。』

明智：「おう、ねーちゃんか？オレや、服部やけど。」

喋っているのはまぎれもなく明智だ。しかし、その口調はどう聞いても平次のそれだった。

蘭：『ああ、服部君。どうしたの？』

明智：「急で悪いんやけど、明日、そっち行ってええかな？」

蘭：『ええ…べつにかまわないけど。どうして急に？』

明智：「いやな、オレの新しい友達の明智っちゅうやつがな、どーしてもおっちゃんに会ってみたい、ゆーとるんや。」

蘭：『へえ、そうなんだ。あ、そうそう、和葉ちゃんも来るんでしょ？。』

明智：「ああ。まだ和葉にはゆーとらんけど、そのつもりや。ほんなら、おっちゃんとボウズによろしゅうゆうつってな。」

明智：「どうでした？結構似てたでしょ？」

平次：「おう…ごつつう似とったわ…せやけど…なんでおまえがオ

レの真似して電話せなあかんのや！」

明智：「だって毛利さんは私のこと知らないし…。」

平次：「せやったら無理に電話せーへんでええやんか。」

明智：「まあ…でもべつに気づかなかったしいいじゃないですか。それより和葉さんに連絡しないと。」

明智は平次の尋問を笑顔で軽く受け流すと、もう一度受話器を手に取ったが、

平次が慌ててその明智の手から受話器を奪い取る。

平次：「和葉にはちゃんと連絡しといたるで先オレの部屋戻つてけや。また明智にオレの真似されたらかなわへんわ。」

明智：「ははは、そんなに心配しなくてもいいですよ。」

おとなしく部屋に戻った明智は一人でパソコンに向かっていた。画面の中央には「毛利小五郎」その上の欄は「工藤新一」。

明智：「毛利小五郎ですか…。面白いことになりそうですね。」

明智の眼鏡がキラリと光る、もちろん口元にはいつもの微笑をたたえて。

FILE 3 東京へ！（後書き）

どーも、雪場です。

今回で連載も3回目、少しは文を書くことに慣れてきたつもりですが…まだまだ駄文ですね。

サブタイトルは「東京へ」なのにまだ皆さん大阪にいるんですね。

タイトル決めた時点では移動しているつもりだったのですが、ちょっと予定外でした。

次回こそは本当に舞台が東京に移りますので。

それでは、どうぞこれからもよろしくお願いします。

FILE 4 出会い

次の日の朝、平次と明智と和葉の3人は、朝一番の大阪発東京行き
の飛行機の中にいた。

窓の外を見ると、まだ東の空の太陽は半分しかその顔をのぞかせ
ていなかった。

平次：「ふぁーあ。ねっむいなー。」

平次が眠そうに大きなあくびをした。なんせ今日は5時に起きて仕
度していたのだから。

和葉：「せやね。こんな急いで行かんでもよかったんとちゃう？」

同じく5時に起こされた和葉も眠そうな顔をしている。

明智：「すいません。決めたのが前日だったからこれしか空いてな
かったんですよ。」

まあ、そのぶん早く毛利さんに会えると思うと私は嬉しいんですけ
どね。」

明智はよっぱど待ち遠しいのだろう、眠そうな二人を尻目に、朝
からずっとはしゃいでいる。

そんなはりきっている明智から目をそらして窓のほうを向いた平
次は、

平次：「（そんな期待せんほうがええと思うんやけどなあ。）」
通り過ぎる雲を見ながら、そう思っていた。

机の上には、目玉焼きと味噌汁、まだ湯気の立ち上っている白いご飯が並んでいた。

蘭：「お父さん！今日は昼から服部君たちが来るって言うてたじゃない！」

小五郎：「しよーがねーだろ。急な事件が起きたんだからよ。大阪のガキにつきあつてられるほど暇じゃねーんだよ。じゃあ、行ってくるぞ。」

背広を着ながら大急ぎで朝飯をかきこむと、すぐに出て行ってしまった。

今日の明け方、事件が発生してさつき目暮警部に呼ばれたのだ。

蘭：「ちよっとお父さん！…もう、せっかく明智君だったっけ、楽しみにしてくれてたのに…。」

コナン：「あれ、蘭姉ちゃん、その明智って言う人も来るの？」

いつものようにほったに米粒をつけながらご飯を食べていたコナンが箸をとめた。

蘭：「そうよ。なんでも服部君の新しい友達みたいよ。」

コナン：「（あいつがこっちに連れてくるってことは…なんかいやな予感…。）」

『ピンポーン』

蘭：「あつ、来たみたいよ。」

コナン：「（おいマジかよ…昼に来るんじゃないのかよ…。）
ぶつぶつ文句を言いながらも、朝食を急いで胃に流し込んだ。」

蘭がドアを開けると、見慣れた顔が二つあった。

その後ろから明智が、朝から急に押しかけて少し申し訳なさそうに頭を下げた。

平次：「おう、くど…ボウズ元気にしottaか？あれ？おっちゃんはどこ行ttたん？」

蘭：「ごめんね。なんか急な仕事が入ttちゃttたみたいで…明智君、楽しみにしてくれてたのに…。」

明智は軽く頭を振り、笑ttて言ttた。

明智：「いいですよ。気にしないでください。」

ふとコナンと明智の目があttた。

コナンは思ttていたよりも頭が切れそうだな、と感じttた。

明智：「ボウヤ、名前はなんて言ttつの？」

コナン：「江戸川コナンだよ。お兄ちゃんは？」

明智：「ああ、僕は明智耕介。（江戸川：？）」

明智は突然振り返ると、和葉と何か話していた蘭に声をかけた。

明智：「ねえ蘭さん、この子どうして毛利じゃないんですか？」

蘭：「知り合いの親戚の子なんだけど、両親が外国に居て、うちで
あずかっているの。」

明智：「（……？！）それ、いつごろからですか？」

明智の目が輝きを増した。

蘭：「えっ、去年の冬ごろからだけど。」

明智：「（やつぱり…）あっ、そうなんですか。」

明智は笑顔で丁寧にお礼を言うと、コナンに誘いかけた。

明智：「ねえコナン君、お兄ちゃんとあっちのお部屋で遊ぼうか。」

コナン：「う、うん。」

コナンの部屋

明智がコナンに続いて部屋に入り、後ろ手でドアを閉めた。

ドアがしっかり閉まっているのを確認して、こう切り出した。

明智：「さて、いきなり本題に入ろうか。君、工藤新一でしょ？」

コナン：「明智兄ちゃん、何言ってるの。ボクは江戸川コナンだよ。」
少しはそんな予感もあったのだが、まさかこんなに突然に來るとは夢にも思っていなかった。

冷や汗が流れるのが自分にも分かった。

明智：「いや、私の考えが正しければ君は工藤新一のはずです。これを見て下さい。」

落ち着いた手さばきでノートパソコンを取り出す。

明智：「工藤新一が行方不明になる前の最後の事件がこれ。」

そして行方不明になったあと、急に活躍しだしたのが毛利小五郎。君がここに來たのはそのちょうど間。

もう何が言いたいか、分かりますよね、工藤さん。」

明智がさつきからよく見せる笑顔で尋ねる。：「今度ばかりは目は笑ってはいなかったが。」

死のような沈黙がしばらく続いた。

その沈黙を破ったのはコナンだった。

大きくため息をつき、覚悟を決めるとぼそつと話し始めた。

コナン：「………………。はあ…：そうだよ、オレは工藤新一だよ。……でも、おめー、ただの高校生なわけねーよな。」

明智：「私は名古屋のさえない探偵ですよ。」

またあの笑顔だ。

そのころ平次は明智がコナンと二人きりで奥の部屋に行ったことを氣にかけていた。

平次：「（明智なにやつとるんやろ？まさかもう工藤正体ばれとったりして、まあ、そんなことはないやろ。ちよつと覗いてみよか。）」

平次：「あけちー。なにしとるん？」

部屋に入ると同時にコナンの不機嫌そうな声が襲ってきた。

コナン：「服部、おめーこいつにおれのことしゃべったか？」

平次：「なんや工藤、おまえ明智にばれてもうたんか？いきなり見抜いてまうなんて、さすが明智やな。」

コナン：「感心してる場合じゃねーよ。本当にしゃべってないのか？」

平次：「嘘ゆーてどないすんねん。だいたい、ここに連れて来たんもおまえやのーておっちゃんに会わすためやったんやし。」

コナン：「まあ、それなら仕方ないけど…。」

明智：「あの一、やっぱり服部は工藤さんのこと知ってたんじゃ…。」

「

平次：「すまんかったな。せやけど、こいつに内緒で勝手に正体言うわけにいかへんかったからなあ。」

明智：「まあ、何か訳があつたのなら仕方ないですけど…。」

その日の午後、蘭の提案により、みんなでトロピカルランドへ行くことになった。

トロピカルランドは休日だったため、とても大勢の人でにぎわっていた。もちろん平次たちは初めてである。

蘭：「さーて、コナン君どこか行きたいところある？」

コナン：「僕ジェットコースターがいい！」

いつも通り蘭の前では子供ぶっているコナンを、少し離れて明智と平次が見ている。

明智：「工藤さん…いつもああなんですか？」

平次：「ああ、そうや。まだ他の人に知られたらあかんから子供のふりしとるんや。」

明智：「でもあれは…甘えすぎていませんか？」

平次：「明智もそう思うか！工藤たまにな、どー見ても楽しんでもようにしか見えへんときあるねん。」

明智：「まあ大変なんだし、多少のことは役得ってことで大目に見てあげましようよ。」

平次：「せやな。ちょっとはおいしいところもないとな。あいつも一応男なんやし。」

コナン：「なにが役得だよ。」

明智：「あ？聞こえてました？」

明智は必死に笑いをこらえていた。

コナン：「バー口。どんだけ大変だと思ってんだよ。」

平次：「そないなことゆうとつても、ほんまはちょっと楽しんどるんやろ？」

コナン：「まあ、ちょっとはな…。って、んなわけねーだろうっ！」

蘭：「コナンくん？さき行っちゃうよー？」

明智：「ほらほら、君のやさしいお姉ちゃんが呼んでますよ。」

コナン：「（明智…後でぶっ殺す…。）」

ジェットコースターに乗ろうとした5人だったが、当たり前ながら、コナンの頭脳が超高校生級といっても、身長は小学一年生。とても乗れるような身長ではなかった。

当然門前払いをくらい、あきらめて他のアトラクションを探すことに。

和葉：「平次、どつかええところある？」

平次：「どこでもええんとちゃう？とりあえず人の少なさそうなあつこから行かへんか？」

平次が指差したのはジェットコースターの隣にあるアトラクション。どうも2〜3人でボートに乗って洞窟のようなコース内を探検していくものらしい。

明智：「まあ、比較的並んでいる人数も少ないし、10分もあれば乗れるんじゃないですか？」

とりあえずアトラクションは決まり、5人で列の最後尾に回る。

コナン：「一度に2人から3人までつて書いてあるから、まずボクと平次兄ちゃんと明智兄ちゃんに乗るね。」

5人のうち、一番先頭に並んだコナンが提案する。

順番はすぐに回ってきた。

コナンと平次がボートに乗り込み、明智が乗り込もうとしていると、突然蘭がすつとんきような声を上げた。

蘭：「いけない！さっきのジェットコースターのところにバッグ置きっぱなしだった！

ちよつと取ってくるから、和葉ちゃん先に乗っててくれる？」

和葉：「え？アタシひとりで？」

蘭：「明智さん、いっしょに乗ってあげてもらえませんか？」

明智：「あ…いいですけど…それより、早く行ったほうがいいですよ。」

蘭がそれとなく和葉と目を合わせた。

蘭：「（あの人でしょ和葉ちゃんが言っていたのは。なかなかいい人そうじゃない、がんばってね。）」

和葉：「（おおきに、蘭ちゃん。）」

『じゃあ、お二人ずつでいいんですね。…出発します。』
コナンと平次を乗せたボートが洞窟の中へ消えていった。

次のボートもすぐにやって来た。

蘭のちよつとした計略で、二人きりで乗ることになった和葉と明智。

もちろん、明智はそんなこと気づいてもいないのだが…。

FILE 4 出会い（後書き）

どーも、雪場です。

さて…さっそく正体がばれてしまいました（笑）

でも、それはおいといて、

今回は予定通り東京への移動も済んだし、このまま順調にいけるといいんですが…。

まあ、マイペースに書いていきたいと思っております。

それでは、次回をお楽しみに。

FILE 5 観覧車 く予告く

ゆつくりと洞窟の中に明智と和葉を乗せたボートが進んでいく。明智は出発の前に係員から渡された光線銃を興味深そうにながめていた。

どうやらこれで現れる敵を撃ち、点数を競う形式らしい。

洞窟の中は、ところどころにぼんやりとした明かりがともされており、暗い洞窟の中、その灯が作り出す明暗が、空間を幻想的な雰囲気にしていた。

その中を順調にボートは進んでいた。

明智の銃口は寸分の狂いもなく正確に、次から次に出てくるモンスターたちを捕らえていく。

和葉：「明智君、上手なんやね、こついうの。」

明智：「まあ、拳銃の扱いには慣れてますからね。」

和葉：「え？」

和葉が驚いたのは明智の言葉ではなく、その目にだった。

偽物の銃とはいえ、銃を構えているときの目に、背筋が冷たくなるような『何か』を感じたのだ。

しかしそれも一瞬だけ、振り向いた明智の目はいつものような優しいものになっていた。

てっきり自分の言葉に驚いていると思い、急いで説明をする。

明智：「以前アメリカに居たことがあります、そのときに覚えた

んですよ。

それより、和葉ちゃんもなかなかお上手で。何か運動しているんですか？」

片手で光線銃をフルに活用しながら逆に明智が尋ねた。

和葉：「一応…合気道二段なんやけど、蘭ちゃんのほうがもっと強いで。」

自分が強いことを話す気にはあまりなれなかった。明智の反応を気にしていたから。

さりげなく話の中心を蘭に移そうとした。

明智：「彼女も合気道ですか？」

和葉：「蘭ちゃんは空手やけど、都大会で優勝したこともあるらしいんよ。」

明智：「（それじゃあ工藤さんも大変ですね。）」

和葉：「え？なんかゆった？」

明智：「いえ、私や服部は竹刀の一本でもない…いやあっても蘭さんや和葉ちゃんにはかないそうにないな、っておもいました。」

和葉：「いやアタシは…ねえ、そんなんやなくて、もっとおしとやかやから…。」

とか何とか言いながら、結局和葉も明智と同じくらい、いやそれ以上の敵を倒していた。

明智：「（はは…これは工藤さんより服部のほうがだいぶ大変ですね。）」

「そ、そうなんですか。」
思ったことを言いかけそうになったが、先を考えて無難な返事をする明智だった。

しばらくすると、水路の先に大きな光が見えてきた。

明智：「えっもう出口ですか？全然当たんなかったですよ…。
銃使うの久しぶりでしたからねえ。」

このゲームでの新記録を作ったのだが、明智に言わせると、『全然当たんなかった』らしい。

ボートから降りてもまだ末練が残っているような表情の明智だったが、そんなことは気にもとめず、服部が地図を見ながら聞いた。

平次：「ほな次はどこ行こか？」

ふと見ると、ベージュ色のズボンのポケットから、お守りが少し顔を覗かせていた。

明智：「服部、そのお守り、和葉ちゃんのおそろいですね。」

思ったことはすぐに口に出す。彼の言動は、とても単純に思えた…ときたま見せる神秘的な表情をのぞけば…

平次：「ああこれか？あいつが昔オレにくれたんや。」

どうでもいいことのように、サラッと言った。

でも、それが彼なりの配慮であり、格好のつけ方なのだろう。

そのとき、和葉の時間が一瞬止まった。

誰もそのことには気づく者はいなかったのだが。

和葉：「あ…あのお守り…。」

無意識に自分のお守りを握り締めていた。

もう一つ、自分の中で凍りかけていたものに、再び火が灯ったことに気づいた。

しかし彼女の純粹さの中では、二つの気持ちが共存することはできないことも同時に悟った。

平次：「じゃあ、最後に観覧車行つて帰るか。なあ、和葉。」

見るとお守りを握り締めたままじっと地面を見つめていた。

平次：「おい？聞こえとるか、和葉？」

和葉：「えっ？ああ…観覧車？アタシもええよ、それで。」

トロピカルランドの大観覧車。その日はそれぞれにかしら特別な思いを抱いている人々を乗せながら回っていた。

窓の外を見れば米花町へ沈む真っ赤な夕日が見ることができ、すばらしく赤い夕焼け。明日は間違いなく快晴だろう。しかし、誰一人外の景色を楽しんではいない。

それぞれが全く違う思いを抱いていた。

平次は和葉のことを、コナンと蘭は全ての元凶となったあの日のことを、

和葉は平次と明智のことを。そして明智は……。

あつという間に一周は過ぎてしまった。

明智：「じゃあ、帰りましょうか。今日は楽しかったですね。」

コナン：「そうだね。またみんなでどこか行こうね。」

平次：「せやったら今度は海に行かへんか？もちろん夏になってからな。」

お互いさつきまで悩んでいたことを隠し、再び来たときのように楽しそうに、にぎやかに帰っていった。

しかし、心の奥ではなにかきこえないものを感じながら……。

次の朝、まだ明智とコナンが寝ているなか、蘭たちはもう朝食を片付けていた。

和葉と蘭が楽しそうに何か話している隣で、平次はトーストをくわえながらテレビを見ている。

また平次のことを考えていると、蘭が何か思い出したように話しかけてきた。

蘭：「ねえ和葉ちゃん、買い物に行かない？米花デパートで今宝石

展やってるみたいよ。
見に行ってみない？」

（買い物か：気を紛らわせるちょうどええかもしれへんわ。）

和葉：「せやね。平次はどないする？」

ほんとに平次たちと離れて落ち着いて考える時間が欲しいのだが、横にいる以上聞かないわけにはいかない。

そんな気持ちを知ってか、平次はテレビに顔を向けてまめんどくさそうに言った。

平次：「行ってもどーせ荷物持ちやろ。オレは明智たちとこの辺うろつろしとるわ。ゆっくり行つてき。」

和葉：「ほな、そうするわ。蘭ちゃん、行こか。」

こうして二人は部屋を出て行った。

和葉たちが出て行った後、2時間ぐらいしてやっと明智とコナンが起きてきた。もう昼になっていた。

朝食と昼食を一度に済ませると、明智がこう話を切り出した。

明智：「工藤さん、一つ聞いていいですか？」

彼がこう切り出したときにはろくなことがない。そう思っていたコナンだが、渋々承諾した。

コナン：「いいけど…何だよ？」

明らかに嫌そうな顔をしている。

しかしそんなことを気にする明智ではなかった。

明智：「いっつもどうやって毛利さんの代わりに推理してたんですか？」

そうだった。何でも知っているように思えたが、彼は結局数日前に知り合っただけ。本当はなにも知らないのだ。たとえこんなに初步的なことさえも。

そんなことを感じながら、平次が答えた。

平次：「それはやなあ、こいつが麻醉銃つこーておっちゃん眠らせよって、ほんでこの変声機でおっちゃんの声だしとったちゅー訳や。」

明智：「その変声機、誰が作ったんですか？」

コナン：「ああ、これはオレの家の近くに住んでいる博士に作ってもらったんだよ。」

明智：「へえーっ。すごい物作りますね。」

素直に驚いた。明智も平次たちと同じだ。

未知のものに対しては子供のような好奇心を寄せる…目をきらきらと輝かせながら。

コナン：「なんなら今から会いに行くか？どーせおれも博士に頼みたいことがあるし。」

平次：「どーせここにおっても暇やし、ほんならその博士んどこ行ってみよか。」

博士の家に着いた。

玄関のチャイムを鳴らすと、いつも通り大きな声で博士を呼んだ。

コナン：「博士ー。いるかー。」

奥から博士が出てきた。

今まで飲んだのはカプチーノだろうか、口の周りに薄茶色の髭ができています。

阿笠：「おお、新一か。おや、後ろの二人は誰なんじゃ？」

コナン：「ああ、こっちの色の黒いほうが服部で、眼鏡かけてるほうが明智。服部は大阪の探偵で、明智は名古屋の探偵。」

明智：「はじめまして、阿笠博士。」

コナン：「……（えっ？）」

明智と平次はさつそく中で阿笠博士の発明品の数々を見せてもらっている。特に明智はこの一風変わった発明品が気に入ったようだ。

明智：「しかしすごいですね。変声機だけでなく、こんなシューズまで作ったなんて。まるで現代のエジソンですね。」

阿笠：「こんなもんで驚いてもらってではこまるぞい。ほれ、そこにあるのもわしの発明品じゃ。」

褒められて得意げになっている博士をコナンが捕まえて奥に引っ張っていく。

コナン：「なあ、博士、ちょっと。」

阿笠：「なんじゃ新一、今説明しとるところじゃったのに……。」

コナン：「そんなことより博士、頼みたいことがあるんだけど…」
博士の耳元に口を寄せる。

コナン：「……………」。

阿笠：「じゃが新一、なんでなんじゃ？」

コナン：「いーからいーから。じゃ、何かあったら電話しろよ。」
そういつて博士の肩を軽く叩くと、くるりと向きを変えた。

コナン：「じゃあ明智、そろそろ帰ろうか。」

平次：「せやな。もう夕方やし、そろそろ和葉らも帰ってくるやろ。」

明智：「ええつ、でももうちょっと…」。

まだまだ見たかったようだ。

未練がましく発明品を抱えたままさびしそうな表情を見せる。

コナン：「また次来た時に案内してやつから。さつ、帰ろうぜ。」

明智：「じゃあ…そうしますか。」

毛利探偵事務所に戻ってきた。もうだいぶ日が傾いて町を紅蓮に染めている。

赤い光が差し込む室内で、平次がソファに座ったまま大きく背伸びをした。

平次：「あー、腹減ったなあー。」

さつきから何度目だろう、平次がこう言うのは。
人の家に来て、も遠慮というものを全く知らない平次に、もうなれた
様子のコナンがあきれ顔で無言の返事をする。

蘭・和葉：「ただいまー。」

平次：「おつ、やっと帰って来よったか。」

そう言いながらソファから急に立ち上がる。

コナン：「蘭姉ちゃん、デパートどうだった？」

蘭：「それがね、ほら予告状があったでしょ、それで警備員が
いっぱいいて、大変だったんだから。」

コナン：「えつ、予告状って？」

思いもかけないものに出会ったとき、彼はいつも同じ表情を見
せる。

そう、あの目を大きく開け、妙に子供っぽい表情だ。

そしてそんなコナンを後ろから、明智が銀色の眼鏡越しに見つ
めている…

蘭：「あれ、コナン君知らなかった？今日の新聞に1枚使って載
ってたけど。」

蘭：「ほら、ここ。」

蘭が指さしたページにはこうあった。

『明日、時を告げる二本の腕が初めて逢瀬を成したとき、

教皇へと舞い降りた聖霊の血をいただきに
米花デパートに参上する 怪盗キッド
』

FILE 5 観覧車 〱 予告〱 (後書き)

どうも、新年初投稿です。

ここまで読んでいただいて本当にありがとうございます。

読んでいただいて下さる人がいることが、私にとって何よりも励みになります。

あと、もし暇でしたら最後の予告文、何を示しているか、考えてみてください。

それでは、これからもどうぞよろしくお願いします。

FILE 6 再会

目の前に無機質に並べられた文字を眺め、コナンは無意識に唇を噛んでいた。

コナン：「（…キッド…）」

そんな緊張感を、あの人の、妙に間延びした声が一気にぶち壊す。

平次：「なんや、暗号はそないたいしたことあらへんなあ。」

明智：「そうですねえ。まあ、蘭さん、一応警察に連絡していただけますか？」

明智も、予告主のビクネームに臆することなく、普段通りの、明るい声で答える。

和葉：「え？もう暗号とけてもうたん？」

平次：「ああ、そうや。名探偵が3人もおるんやから、これくらいの暗号やったら朝飯前や。」

和葉：「（3人って、平次と明智君の2人やないの？）」

「で、結局どんな意味なん？」

小さく咳払いをすると、明智がまず口を開いた。

明智：「ええ、まず2行目の『教皇へと舞い降りた聖霊の血』っていう部分ですが、ここで教皇が示すのはおそらくキリスト教でしょうね。キリスト教、新約聖書で聖霊を象徴するものは、『dove』、ハトのことです。まあこの部分はハトの血、ブラッド・ピジョンのことを示すと見て間違いないでしょう。さっき蘭さんたちが出

かけるってことで少し調べたんですが、今、米花デパートには、時価数億円は下らないと言われる最高級のブラッド・ピジョンがあるそうですね。キッドが狙っているのはこれですね。」

続きを平次が受ける。

平次：「ほんで最初の『時を告げる二本の腕が初めて逢瀬を成したとき』やけど、腕を表すhandちゅうのには時計とかの針ゆう意味もあるんや。せやから、時を告げる二本の腕、長針と短針が重なった時っちゅうことや。」

コナン：「…そしてそれはおそらく午前1時5分すぎ。」
うつむいたまま、少し沈んだ声で呟いた。

蘭：「コナン君?!」

コナン：「も、もちろん平次兄ちゃんが言っていたんだけどね。」

平次：「せや。こんなちっこいボウズにんなもんわかるわけないやろ。」

そう言つてコナンの頭を押さえつけた。押さえつけられた当人は苦笑いするしかなかったが。

和葉：「せやけど、なんで1時5分なん？最初に重なるんは12時とちやうの?」

平次：「アホ。予告状見てみい。“逢瀬”ってあるやろ？逢瀬ちゅうのは恋人が会うことを指すんや。恋人やつたら当然その前までに

一回は会つとるはずやろ？つまり、すでに1回は同じ位置におった
ゆーこつちゃ。

12時から1度別れて再び会つ、せやから1時5分やねん。なあ明
智。」

明智：「そうですよ。それより、警察への連絡も済んだことだし、
ご飯にしませんか？もう、さっきからお腹が鳴りっぱなしですよ。」

コナン：「（夫婦漫才の次はコンビ結成かよ…）」

この二人の息の合い方には、ただただ呆れるばかりだ。
まるで昔からの親友みたいに、人の心を捉える“何か”が、明智に
はあった。

蘭：「あ、じゃあすぐに作りますね。」

和葉：「蘭ちゃん、アタシも手伝うわ。」

二人は台所へ駆けていった。しばらくして、魚を焼く、香ばしい香
りが流れてきた。

その日の夕食はとても賑やかなものになった。

それぞれの学校のことやスポーツのこと、もちろん事件のことも。

つねに笑顔と笑い声が絶えることはない、至福のひと時だった。

……またそれは、嵐の前の静けさでもあった。

楽しいひと時はすぐに過ぎ去ってしまい、テーブルの上に並べられ
ていたお皿も片付けられ、壁の時計は11時過ぎを示していた。

盛り上がりも一段落したところで、平次がテレビの横にあった時計に目を向ける。

平次：「ちよつと早いけど、また明日も朝早いし、そろそろ寝よか。」

素早く明智とコナンに目配せする。小さく二人は頷いた。

それぞれ席を立ち、蘭とコナンの後について部屋を出る。

蘭：「じゃあ、和葉ちゃんは私の部屋で、服部君と明智君はコナン君の部屋でね。」

コナン：「おやすみ、蘭姉ちゃん、和葉お姉ちゃん。」

明智、服部、コナンが部屋に入っていく。

平次：「で、工藤、おまえ米花デパート行くつもりなんやろ？」
部屋に入るなり、二人の前に身を乗り出し、そう切り出した。

コナン：「たりめえだよ。警察に任せてたんじゃキッドは百年たつても捕まんねーからな。」

平次：「せやけどまだ11時やし、どないして時間潰そか。」

明智：「ねえ、工藤さん、一つ聞いていいですか？」

コナン：「いいけど。」

明智：「なんで工藤さんは小さくなっちゃんだんですか？」

言われてみれば、聞くのが当然の質問だ。というより、今まで聞かなかったことが不思議でならない。

明智のこの辺が平次が言う、「おっちょこちょいなところ」なのだろうか。

コナン：「あ、まだ言っていなかったつけ。それはな、トロピカルランドで黒ずくめの男の取り引きを目撃したら、後ろから別のやつに殴られて、毒薬を飲まされて、気がついたらこうなってた、っていうわけさ。」

軽く説明しするだけのつもりだったが、最後になって明智の目が輝きだした。

説明が終わる頃には、もう何か言いたくてうずうずしている様子だった。

コナンが言い終わるか終わらないかといったところで、耐えかねて明智が口を挟んだ。

興奮を抑えきれずに珍しく早口で一気に喋りきった。

明智：「もしかしてその黒ずくめの男って、お酒の名前ついていませんでしたか？」

今度驚かされたのはコナンのほうだ。

コナン：「えっ、明智、おめー知ってんのか？」

少々あつけにとられたように聞き返した。

明智は当然のように、またマシンガンのような早口で言った。

明智：「知ってるもなにも、名古屋でも彼等がかかわっている事件は多いですよ。」

なにしろ、名古屋で起こる事件の半分、迷宮入りの事件のほとんど

は彼等の仕業だつて言うくらいですからね。」

ここで平次はあることを思い出した。

平次：「そーいや明智、おまえ犯罪組織のデータもある、ちゅうとつたよな。ひよつとして奴等のデータもあるん？」

明智：「もちろんですよ。これが私の生命線ですからね。」

そう言つて自慢げに自分のノートパソコンを軽く二、三度叩く。

コナン：「本当かよ！ちよつとそれ見せてくれないか？」

コナンにすれば思つても見ないチャンスだ。彼には絶対に情報が不足してる。

そして今、目の前にはその宝の山が眠っている。気持ちかはやるのも無理はない。

明智：「いいですよ。」

今までの興奮が嘘のような、妙に低く、落ち着いた声だった。

1分後、明智自慢のデータファイルが開かれた。

明智：「はい、これが彼等の起こした事件のリスト。でもほとんどが発表済みのやつで、目新しいものはないと思いますよ。」

コナン：「…10億円強奪事件、大黒ビル爆破事件…残念だが、全部知ってる事件だな。…あれ、この右下の「DEAD」っていうのは何？」

明智：「ああ、それは組織の死亡者リスト。役には立たないと思いますけど、とりあえず何事も整理整頓ですからね。」

「この、灰色の脳細胞もね。」

軽く笑うと、そう言っただけ自分の頭を指で二、三度叩いてみる。
しかし顔を挙げているものはいなかった。二人とも画面に釘付けだったから。

コナン：「死亡者リストかあ。一応見てみようか。」

明智は少し残念気な顔をしていた。でも、場の雰囲気を読んでないのだから仕方ない。

コナン：「野本昌治、豊田稔…聞いたことのねー名前だな。」

明智：「ああ、それは名古屋での事件の人ですよ。東京のは、もつと下にあると思いますけど。」

気を取り直して真面目に答える。

コナン：「あ、あった。柊山憲三、呑口重彦、宮野明美…やっぱ知ってるのばっかだったな。」

明智：「すいませんねえ。なにしろこつちの事件は新聞か警察の発表でしか知ることができませんからね。」

発表された人名とデータベースとで照らし合わせてこのリストを作ったんですから。」

平次：「せやけど警察の発表ゆーたって、組織のことは出てこーへんはずやろ？なんでわかるん？」

明智：「私も工藤さんと同じで組織のことは長く調べています。筆の跡を見れば誰の絵か分かるように、その手口を見れば、全て分かりますよ。」

「じゃあ、工藤さん、こつちの事件について詳しく教えてくれませ

んか？」

コナン：「いいけど、その前に明智の解決した事件について教えてくれないか？」

明智：「じゃあ、何から話しましょうか。長久手のビル爆破予告、市議会議員の毒殺事件…いろいろありますからね。まあ、まだ予告の時間まではかなりありますし、ゆっくりいきましようか。」

彼の才能は収集、整理だけではなかった。

ひとたびその気になって口を開けば、時たま抜けたことを言う彼の姿は消え、

事件に慣れている二人が思わず時間のたつのを忘れてしまうほどの魔力を持った巧みな語り手が顔を出した。

部屋にかけてある、サッカーボールをかたどった時計が12時を指していた。

平次：「なあ工藤、そろそろ出かけーへんか？」

立ち上がると、若草色のジャンバーを手に取り、いつもの帽子を後ろ前にかぶった。

コナン：「そうだな、余裕をもって出た方がいいしな。」

コナンも立ち上がり、机の上に投げ出されていた時計型麻醉銃をはめる。

明智：「ええつ。まだまだ話したいことはあるんですけど…」

平次：「そんなんは帰ってきてからまたゆっくり聞かせてもらっわはい出発出発。」

明智に彼の紺色のコートをかぶせ、手を引っ張るようにして部屋を出る。

コナンはその後ろを歩いてゆく。

玄関から外に出ると身を刺すような寒さが襲ってきた。思わず上着のフアスナーを首のところまで上げる。

上を見上げると、鉛色の雲が暗い夜空を覆っていた。

コナン：「そっぴゃ、雪が降るって天気予報で言ってたっけな……。」

米花デパートが見えてきた。すでにパトカーが十数台停まり、物々しい警備体制がとられている。

その中を進み、三人は米花デパートの入口までたどり着いた。

米花デパートの一室、宝石展示室

ここには中森警部を含め、七人の警官で厳戒態勢に入っていた。予告の時刻が近づき、空気が張り詰めていく。

茶色のスーツを着た腹心の部下の一人が、時計を見て中森警部にささやきかける。

刑事：「警部、そろそろです……。」

中森：「おう、絶対逃がすなよ。……！」

突然無線が鳴り出した。

「くそつ、なんでこんなときに…。」
いらだたしげに無線を取り出す。

『あー、中森警部ですか？えーと、今探偵と名乗る三人組の少年が来まして…』

入口を固めている警官かららしい。

中森：「そんなよく分からんやつ、入れるわけないだろがつ、馬鹿もん！」

『ですがー、目暮警部は、中に入れろとおっしゃってましたし…それに…』

中森：「それに…何だ？」

『それにですねー、そのうちの一人は大阪府警の刑事部長さんの御子息だったので…』

明らかに雲行きが怪しくなってきた。もう爆発寸前のように少し震えてさえいる。

中森：「それで結局通したのか？…何でそんな軽はずみなことするんだ、このバカモンが…！」

『しかしー、彼らは実は警察に予告時間が分かったと電話してきた方達でしてー、目暮警部はどうしても…』

中森：「あー、分かった分かった。…ったく、これだから一課の間は…」

叩きつけるように無線を切った。

中森：「まあ…まさか自分から通報するわけは無いだろうな、いくらキッドでも。」

にしても腹が立つのは…大体なんでキッドを捕まえるのに一課まで出てこなくちゃいけないんだ、そこまで二課が信用できるのか。それに一般人まで立ち入らせて、なあ？」

刑事：「はあ…まあ…。」

いくら腹心の部下といえどもあまり絡まれたくない様子で、曖昧な返事しかしなかった。

このときもう他の警官たちは、時計を見るだけで、ピリピリとした緊張の中にいた。

続々と警官の人数が増えていく。予告時刻を目前に控え、このときさらに数人の警官が追加で警備についた。

今入ってきた警官のうち、青い制服をきちっと着こなした、真面目を絵に描いたようなやつを見つけた。

なんとなくそいつには、人を惹き付けるような不思議なオーラがあった。

中森：「配備は完璧だろうな…。」

答えは分かっていたけど、緊張を少しでも紛らわそうと、そいつに話しかけてみた。

こんな状況だが、彼は気丈にも軽い笑顔さえ浮かべていた。

警官：「もちろんです。入口は包囲されていますし、上空にもヘリを一機飛ばしています。」

中森：「よし。それなら今度こそあのキッドを捕まえることができそうだな。」

急に警官が時計を気にし始めた。運命の時はもう目の前まで迫っていた。

警官：「予告の時間まで、あと10秒……9……8……7……6……5……4……3……2……1……時間になりました、警部。」

一瞬の静寂と共に、張り詰めた空気が頂点を迎えた。

1秒……2秒……

しかし何も変化はない。

中森：「まだキッドは現れてないな。」

顔がまだこわばっている。

今までの経験からいつて彼は、キッドが予告通りに来ないはずはないと信じていたから。

幸か不幸か、その期待が裏切られることはなかった。

さっきまでとは全く違う口調で、あの警官が口を開いた。

警官：「いえ、もう来てますよ。 お久しぶりですね、中森警部殿。」

聞きなれた声と共に、突然白煙が上がり、晴れると中からいつもの真っ白なシルクハットとマント姿のキッドが現れた。
ガラス窓の月明かり越しに、あのシルエットが再開の言葉を投げる。

しかし中森警部に再会を懐かしむ時間はなかった。

キッド：「あいにくこつちも急いでますんでね。すいませんが、しばらくおとなしくしておいてもらいますよ。」

キッドがガスマスクを着けながら言った瞬間、部屋の中に白い気体が充満した。

キッド：「心配要りませんよ。少し眠っていただくだけですから…。」

冷たい風を受けながら外の非常階段を上っていく。

…静かな夜だった。乾いた足音だけが妙に響く。

キッド：「相変わらず人数だけの警備だな。まあ、その方が仕事もやりやすくって楽なんだけど。」

お目当ての物を手にしたキッドは予定通り、屋上に向かった。

…そこで待ち構えている人がいるとは夢にも思わずに…。

携帯で何かを話している…終わったようだ。慎重にポケットに携帯を納める。

大きくため息をついた。すぐに白く凍りついた。

屋上ではコナンがちょうど降り出した雪の中、物陰に隠れて彼が来るのを待っていた。

何か重大なことでも考えているかのように深刻な顔をして足元にうつすらと積もり始めた雪を見ていた…

そこに『彼』が現れた。

『彼』は背中にハンググライダーを背負ったまま、コナンの前を通り過ぎ、立ち止まった。

そうして静かに振り返った。

コナンが物陰から出る。

コナン：「久しぶりだね。こそどろさん。」

キッド：「そうですねえ。探偵君。」

FILE 6 再会（後書き）

どうも、お久しぶりです。

ついに連載も6回目となりました。これもみなさんのお陰。本当にありがとうございます。

さて、…この前、サンデー読んで気がついたのですが、どうもあの新キャラ「本堂瑛祐」に、明智がかぶって見えてまして…（汗）まあ、結末まではよもやかぶることは無いと思いますのでご安心（？）下さい。

では、次回をお楽しみに。失礼します。

FILE7 惜別　く真実く

そのころ、米花デパートの下でコナンからの連絡を待っていた平次。

彼は大きなコンクリートの柱にもたれかかりながら、メールを打っていた。…二人のことを考えながら。

2、3日前から和葉が少し変わったのには気づいてた。

それもありつが来てから。でも、不思議なほど明智とは気が合うし、それに今更面と向かって話すのも、ちょっと気が引ける。

…そう思っていたけど、どうしても今日は言わなきゃいけないような気がする。

…歯車がゆっくりと音を立てて動き出した、そんな感じが。

『この前はすまんかったな、おまえを責めるつもりは全くないんや。

べつにおまえが誰を好きになろうがオレには何も言う権利はないしな。

…明智もごつつうええヤツやしな。あいつと付き合つとるとよー分かる。明るいし、おもしろいし…冷静やしな。

…せやけど、大阪でのあの時は…なんて言うんかな、ただ、おまえを別の男に取られたないって思いがあつたんやろな。

…勘違いすんなや、オレは和葉があいつを好きやからって明智を嫌いになったってことはないで。

あいつはな、オレにとって第二の親友や。まあ、第一の親友は…言わんでもええやろ。

せやから今、冷静に考えてみると、知らんヤツに取られるよりかはましかな、って思うんや。

……せやけど、やっぱオレは和葉をあきらめることはしたくない。

でも最後に決めるんは和葉や。

せやから、おまえが本当に好きな人を素直に選んでくれれば、おまえが幸せや、思えるんなら、結果にかかわらず、それがオレの本望や。

でもこれだけは知つといて欲しい。

和葉、オレは……やっぱおまえのことが……』

お世辞にも上手い文章とはいえないが、今まで、ここまで真剣に和葉のことを考えたことのなかった自分には精一杯書いた。

自分の思いを素直に書いたつもりであったが、読み返した平次の顔は、誰が見てもそれと判るほど真っ赤に染まっていた。

平次：「（あかんあかん。こんなん和葉に送ったら、後で何言われるか分かったもんやないな。やっぱやめとこ……。）」

あきらめて携帯を閉じると顔を上げ、闇に舞う純白の雪を見てひとつため息をついた。

携帯を何も言わずポケットに納める。

送らないとは決めたものの削除もできず、そのままにしておいた平次であった。

米花デパートの屋上にてコナンとキッドが挨拶を交わしたまさにそのとき、もう一人の登場人物が現れた。

ゆっくりと灰色がかった鉄のドアがきしみ、1人の青年が入ってきた。

明智：「君が有名な怪盗さんですか、キッド君。」
いつもの微笑をたたえてはいたが、なんとなく高圧的な響きがあった。

とくに驚いた様子もなく、キッドも口に愛想笑いを浮かべる。

キッド：「おや、今日は1人じゃなかったんですね。ところで、見慣れない方ですね。」

明智：「私、名古屋で探偵をしております明智というものです。」
そういつて軽く会釈をする。異常なほど落ち着き払っている。そのことが多少キッドには気にかかっていた。

警察に限らず自分を捕まえようとするものは自分を前にして必ず焦る。その隙を今まではついて簡単に逃げ失せることができたのだ。ここまで冷静でいられたのは…目の前にいる…「探偵君」以来だ。

…ここはなるべく早く逃げるほうが得策だ…
本能がそう警告していた。

キッド：「これはどうも。」

そういつて軽く息をつくと、もう一度二人を見た。
ざっと自分との距離は10m。この距離なら止められることもないだろう。

「でも少し長居をしすぎたようですね。ではまた会いましょう、探偵諸君。」
そういつて素早く手すりに手をかけた。手のひらに雪の冷たい感触が痛みとなって感じられる。

唐突に「彼」が口を開いた。

明智：「ちよつと待ってもらえますか。」

思わず振り返つてしまった。自分の目を疑った。

明智が自分に向かつて真つ直ぐに手を突き出している。

…その先には拳銃がしっかりと握られていた。

キッド：「……………！」

コナン：「…（ワルサーP38）…。」

銀色に鈍く光る銃口がゆつくりとキッド頭へと照準を定める。

明智の顔はまだ笑っていた。しかし、今の彼にあるのはいつもの優しい微笑みではなく、冷笑だった。

…全てのものを見下したかのような、感情を全く感じさせない冷笑。

…今まで見せたことのない明智の一面だった。

明智：「前々から日本の警察の甘さには閉口していましたね。犯人が逃げようとしているのに、指をくわえて見ているだけですからね。でも私は違います。私は手段を選びませんよ。」

拳銃を握る明智の指に力が加えられていく。

コナン：「明智、やめろー！」

コナンが必死に叫ぶ。しかし、もう、遅かった。

明智が引き金を引く。銃声が漆黒の闇に響く。と、同時に、明智がコナンにささやく。

明智：「工藤さん、今です。」

コナン：「おう、まかせとけ。」

銃声に驚いて目をつぶっているキッドにコナンが麻醉銃の照準を合わせ、撃った。

実弾を撃てばさすがのキッドにも一瞬の隙ができる、そう読んだ末の作戦だった。

明智：「やりましたか？」

しかし麻醉針はトランプに刺さってキッドの足元に礫にされている。とっさにキッドがトランプ銃で撃ち落したのだ。

キッド：「残念でしたね。また会える日を楽しみにしていますよ。」

凄まじい閃光と白煙とともに、キッドは消えていた。

コナン：「服部、聞こえるか、キッドは今飛び立ったぞ！」

コナンが探偵バッジに向かって叫ぶ。

キッドがハンググライダーで逃げることを予想して、服部が下で待っていたのだった。

キッドの白い翼は、同じく白い雪と共に、夜の闇と見事なコントラストを作り出し、堤無津川のほうへ向かっていた。

キッド：「つたくなんなんだよあの明智とか言うやつ……。いきなり実弾撃つてきやがって、当たったらどーすんだよまったく。」

「まあ、お目当てのものは手に入れたし、あの人にもまた会えたし、よしとしますか。」

そう言つて内ポケットに手を入れる。手に入れた獲物は、ひどく硬く、冷たかった。と、その瞬間、翼ごと体は大きく傾いた。

急いで体勢を立て直す。さっきも危うく曲がり損ねるところだった。

キッド：「……………なんかさっきから飛び方がおかしいような……………
…って、あのやろー、おもいつきり翼に大穴あけてんじゃねーかよ
！！ う、うわぁー！」

目の前には川沿いに生えている大きな桜の木があった。

服部は堤無津川のところまで来ていた。目の前には花の代わりに純白の雪を身にまとった、桜の巨木がそびえ立っていた。
その幹の上の辺りには、白い三角の布が光っていた。

ポケットから探偵バッジを取り出す。ここに来る前、コナンから渡されたやつだ。

平次：「工藤、見つけたで、堤無津川の近くの大きな桜の木のところや。思うとつた通り、木に引っ掛かっつたで。」

コナンの返事を聞き、軽く答えると、桜の木の根元まで歩いていった。

真下に来た。上を見上げる。とたんに雪が顔に降ってきた。

冷たさに目を細めながらも、引っ掛かっている布に人の姿を確認しようとしていた。

布はまだ時折動いている。彼はそこにいるようだ。

平次：「(さて…どうしようか…登って降ろしてもええけど、そのあと逃げよるかもしれへんし…。警官たち来よるまで待つとくつちゅう訳にもいかんやろし…)」

そんな心配は必要なかった。突然、頭上から雪の塊が落ちてきた。

平次：「うわっ、なにすんねん、このドアホっ!!」
そいつって上を見上げたが、そのときにはもう木の上には何もなかった。

急いで辺りを見回すと、まだ前に黒い人影が走っていくのが見えた。気がつくのと、必死にその影を追っていた。

幸いここは川のほとり。遮蔽物など何もない。見失う心配はなかった。

とうとう川に突き出した栈橋まで追い詰めた。

堤無津川の水面は街の灯を自らに映し出し、そこにもう一つの街を作り出していた。

そこに降り続ける雪は水面に触れたとたん、魔術のようにその存在が消えてしまう。

「彼」はこちらに背を向けて暗い水面を眺めていた。

平次：「もう逃がさへんで。」

軽く肩で息をしながらも、満足そうにそう言った。

しかしキッドは背を向けたままだった。

いつもの白いシルクハットとマントが街灯の灯を受けて光っていた。

キッド：「たしか…服部さんでしたよね。」

平次：「えっ？…ああ、そうやけど…。」

キッド：「今日屋上にいた二人の、高校生のほうともお知り合いですよね。いつごろからですか？」

平次：「明智か？…せやなあ…つい2、3日前にあいつが訪ねて来よったんやけど、何か…あるんか？」

幻想的に輝くマントを翻し、初めてキッドがこちらを向いた。
キッド：「あの人、いい人ですか？」

一番聞かれたくない質問だった。なぜか漠然とした不安を、平次の探偵としての勘が告げていたから。

平次：「あたりまえやろ！」

妙に力がこもった一言だった。自分の不安を払拭するように。

彼はその言葉には反応することなく、さらに続けた。今度は独り言のように小さく呟いて。

キッド：「一つ言っておきます。彼が銃を構えたときに見せた目…あの目は批評家の目ではなく、芸術家の目だった、と。」

遠くからモーター音のような音が聞こえてきた。

キッド：「それでは、そろそろ失礼するとしますか。」
上を見上げると、そう言った。

モーター音はいつの間にかヘリコプターの爆音に変わっていた。
暗い川の水面にさざ波が立つ。

白いシルエットがヘリから降ろされたロープに手をかける。

平次：「あほっ、逃がすか！」
キッドの足めがけて飛び掛った。

一瞬遅かった。

平次の手の間を、彼の足がすり抜けていった。
空をつかむと、そのまま雪の積もる栈橋の上に倒れこんだ。手に痛いほどの冷たさが伝わる。

上を見上げると、勝ち誇った表情のキッドが何か伝えようとしていた。

キッド：「それでは、二人目の名探偵さん、一流の批評家と…芸術家によりしくお伝えください。」

そう言い残すと、小さな機体は雪の舞う空へと消えていった。

その数十分前、屋上では、コナンが探偵バッジを通じて服部と何事か話していた。

ちょうど服部が堤無津川のほとりでキッドに追いついたときだった。

コナン：「うん、そうか、じゃあ後は頼んだ。逃がすんじゃないぞ。」

「
そういつてバッジをポケットに入れた。彼の顔には何の表情もない。
さっきまでとなに一つ変わらぬ表情だ。」

明智：「どうでした？」

コナン：「堤無津川の近くの木に引つかかったてさ。これであつ
ちはどうにか捕まえられそうだな。」
妙にさっぱりとした言い方だった。まるでそれがどうでもいいこと
のように。

明智：「あつちは、って言いますと？」

ゆっくりと顔を挙げた。鋭く光るその目には硬い決意が見て取れた。
コナン：「もう1人いるじゃねーかよ、捕まえなきゃならないよう
なやつが。」

FILE7 惜別 ー 真実 ー (後書き)

どうも皆さん、ここまで読んでくださって有難うございます。

えゝ、コナンの言った、「もう一人の捕まえなきゃいけないようなやつ」果たして誰でしょうか（もうお気づきとは思いますが…）そしてキツドの言った言葉との関係は…

「こうなんじゃないかな？」と、あれこれ先を推理しながら読み進めていただけると幸いです。

それでは、次回をお楽しみに。失礼致します。

FILE 8 彼は…

明智：「『もう一人の捕まえなきゃならないやつ』って…誰のことですか？」

しばしの無言の後に、冷たく、抑揚のない返事が返された。

コナン：「バー口。んなもんわかってんだろ。………明智、おめーのことだよ。」

明智：「工藤さん、冗談はよしてくださいよ。」

少々引きつりながらもまだ微笑みは崩していない…これが彼の生命線なのだから。

コナン：「冗談なんかじゃねーよ。………さっき博士から電話があつてな、明智って言う人物は探偵にも警察官にもいなかったそうだぜ。」

明智とは目を合わせず、眼鏡を月明かりに光らせたまま、キッドが消えていった方向を見つめていた。

不意に明智の顔の微笑が曇った。

明智：「………………。」

コナンがゆっくりと歩き出した。少し白くなった床を踏みしめ、無言で明智の横を通り過ぎる。

…明智からの返答もない。

明智からやや離れて、また振り返った。そして重々しく、決意を秘めてその口を開いた。

コナン：「それだけじゃねえ。おめー、本当は組織の一員だろ？」

明智：「……………」。

沈黙の中、雪だけが降り続けてゆく。

うつむいていた明智が顔を挙げた。

明智：「……………」どうしてそれを？」

口元には笑みをまだ残しているものの、もう目は笑ってはいない。先ほどまで柔らかな光を放っていた眼鏡の奥の双眼も今では、ひときわ冷たく、人を見下したような色を湛えていた。

コナン：「疑問を持ったのは博士の家に行ったとき。あのとき、おめーは初対面のはずなのに博士の名前を知ってた。もちろん、オレはただ『博士』としか言っていなかったのにな。それでちよつとかしいなっと思って思ったわけさ。」

「確証を得たのはおめーが見せてくれた組織のデータさ。あの死亡者リストには宮野明美の名があった。おめーはあのリスト、新聞とかで作ったっていったよな？」

明智：「……………」そうですけど……………」

再び見せた笑顔での冷笑。今はもう、彼はこの推理ショーを楽しんでさえいるようだった。

目の前の子供の浅はかな考えの前を、“聞いてあげる”そんな大人

の表情とでも言えいいだろうか。

コナン：「そこでおめーは墓穴を掘っちまったってわけさ。あの10億円強奪事件の犯人は、新聞や警察の発表では、宮野明美じゃなく、偽名の広田雅美になつてはるはずだからな。つまりおめーは広田雅美が宮野明美であることを知ってた。オレでもある人物から聞くまで知らなかった。そんなことを知ってるのは組織の一員ぐらいだぜ、明智。」

ゆっくりとかぶりを振ると、夜空を見上げて一人静かに笑い出した。その声に、自分への嘲笑とも取れる響きを込めて。

明智：「はは…やっぱりのリストはまずかったですね。そうです、確かに私は組織の人物です。」

でも残念ながら工藤君、私はただの薬の研究者、まあ…言うなればあの宮野志保の同僚ですね。私はただ、あの実験…我々の開発した薬を飲んだ工藤新一がその後どうなっているか、本当に死んだのか、それを調べにきたただけなんですからね。」

コナン：「んなことより、組織について話してもらおうか。そうだし、まずおめーのコードネームからな。」

さも可笑しそうに、2、3度含み笑いをした。徐にその場にしゃがみ、同じ目線になったコナンの頭に笑顔で片手を置いた。

何秒か、じつと相手の目を見つめていたが、ふっと目がゆるむと、落ち着いた、いつもの声でこう言った。

明智：「それは言えませんよ。まあ、私も例の薬の研究をしていま

したから、『出来損ないの名探偵』にちなんで、

<オーモンド・サッカー>とも言っておきましょうか、名探偵君。

「

軽くコナンの頭を撫でて、立ち上がった。

明智：「ああ、あなたのことは組織には知らせるつもりはありませんから。私は組織の一員である以前に一人のマッドサイエンティスト。

あなたのような興味深い実験体を組織に消されるわけにはいきませんから。」

再びニコツと笑いかける。その後、コナンを凝視していた目線がゆっくりと夜空へと移っていく。

笑顔が消え、しばらく黙ったまま何かを考えているようだった。

明智：「それでは私もそろそろ失礼しますか。くれぐれも私を止めようなんていう命を粗末にするような行動はなさないで下さいね。」

「

コナンに鈍く光る銃口を向けると何事もなかったかのようにそう言った。

コナン：「そうはいかねえよ。もう下には目暮警部らが控えているはずだが、見慣れないやつは通すな、って意気込んでな。

大体ここでそんなサイレンサーもつけてないもんぶっ放したらどうなるか、おめーなら分かってるはずだぜ。

さあ、逃げ道はなくなった、どうする？明智：いや、<オーモンド・サッカー>さんよ。」

明智のメガネが鈍く光る。

ふと、その口元に見慣れた笑みが浮かぶ。

そして、声を上げて笑い出した。雪の舞い降りる鉛色の天を仰ぎながら、突然に。

コナン：「おい明智、おめー、何がそんなに可笑しいんだよ。」
ただ、この状況で笑い出す明智が、彼には理解できなかった。

明智：「いえいえ、ただ君がキッドだけで無く、私の心配までしてくれていたことがね。
でも、ご安心ください。そんなこともあるつかと思って、ちゃんと準備してきましたよ。」

コナン：「……なに？」

銃でコナンを制しながら、来たときに床に置いた、黒い小ぶりの鞆を持ち上げる。
鞆から取り出したものは、黒色のファンデーションとSAXの帽子、スプレー缶。

コナン：「明智、それってまさか……。」

明智：「ベルモットみたいな変装は、私には薬にもしたくありませんね。」

かのアルセーヌ・ルパンのごとく、盲点と先入観を駆使すれば、あんな仮装は必要ありませんよ。

たとえば、そこまで本人に似ていなくとも、野球帽を目深にかぶった、色黒の少年。

それが君を抱えて、（急に口調が変わって）大阪弁をしゃべったら、警部はんはどう思うやろなあ。」

コナン：「おい…その声…。」

明智：「なあ工藤、ええこと教えたるか？

俺らがこつち来る、ちゅう電話あったやろ？あれな、掛けたのは俺やで。本人の目の前でな、この声つこーて掛けてやったんや。

…そうそうそんな顔や。あいつもそんな顔して、えろう驚いottaで。」

「…ほな、ちよつとの間だけ、おとなしゅーしとってもらおか。」

スプレーをコナンに向ける。

スプレーを浴びて眠ってしまったコナンを横目で見ながら、ゆつくりと眼鏡を外す。

澄み切った中に、冷たさを同居させた双眼が、そのレンズの下から表れた。

明智：「さて、これでよし、と。あとは帽子をかぶって…準備OKだな。」

目深に帽子をかぶり、黒色のファンデーションを顔と手に塗った明智が眠っているコナンを抱えたまま階段へのドアを開ける。

コンクリートの階段をゆっくりと降りていく。乾いた足音が狭い空間に妙に大きく響く。

そのとき不意に、目暮警部のどなり声が聞こえた。

目暮：「止まれえ！ 手を挙げる！！」

上下左右から現れた警官にあつという間に取り囲まれ、銃を突きつけられる明智。しかし微動だにしない。

ゆつくりと、かつ慎重にその口が開かれた。

明智：「なんや警部ハン！このボーズが犯人に気絶させられよって、急いで病院に連れてかなあかん、ちゅう大事なときに！」

目暮：「は、服部君か？」

警官隊の銃口が少し下を向いた。

明智：「せやからそこはよー通さんかい！一刻を争つとるんやぞ！最初の勢いで押してしまえば勝てる、自信は、目暮警部の目を見て確信に変わった

——彼は、動揺している。この世界は、動揺することは、すなわち負けを意味する。

目暮：「ああ、すまない。今道を空けさせる。」

目暮警部らの横を堂々と通り過ぎ、出口へ向かって階段を降りていく。

ようやく外へでると、雪の降る中、蘭と和葉が待っていた。

蘭は青色の傘、和葉は黄色の傘を差していた。

蘭が駆け寄ってきた。

蘭：「明智：君？どうしたの、その格好？」

そう言いながらも視線は腕の中で眠っている彼をまた優しくそうに、それでいて少し寂しそうな目で見つめていた。

明智：「ああ…そんなことより、コナン君が…」。

眠っているだけですから大丈夫だとは思いますが、念のため病院に連れて行ってあげてください。

私はまだここを離れるわけにはいかないんで…。さあ、早く。」

蘭はコナンを抱きかかえると、明智にせかされながら病院へ向かった。

明智はその二人の様子を、遠く過ぎ去るまで見つめ続けていた。

蘭が行ってしまったのを見届けてから、変装を解き、明智は口を開いた。

いつの間にか雪は止み、雲の切れ間から明るい月が顔を出している。

ゆっくりと後ろの和葉を振り返った。

明智：「遠山さん、1つ伝えなきゃならないことが、あるんですが。」

和葉：「えっ…何なん？」

明智：「実は…さっき名古屋から連絡がありまして、急な事件が起きたんですぐに名古屋に戻らなきゃならなくなりました。」

多分、当分はこっちは来れないと思います。もちろん、転校届けは出しておきますから。」

そついうと、少しきまりが悪そうに頭をかいた。

一瞬の間、和葉には状況がよく理解できなかった。

和葉：「えっ……。じゃあ明日出発するん？」

明智：「いえ、一刻を争う状況なんで、今すぐ行かなければなりません。今までお世話になりました。みなさんによろしく。」

うつむきながらも、決意は固めていた。

和葉：「（せやったら、今のうちゆーとかなあかん。）」

顔を上げ、キツと前を見据えると、慎重に、言葉を一つ一つ選ぶように話しかけた。

和葉：「あの…明智君、アタシからも伝えたいことがあるんやけど…。」

明智：「何ですか？」

今まで通りの、変わらない余裕とも取れる、何とも言えない笑みを浮かべたままだった。

和葉：「あの…アタシ…明智君のことが……」

好きなんやけど…。」

和葉：「あの……………明智君はアタシのこと…、どう思っとるん？」

彼の顔から笑みが、ふっと消えた。目線を和葉からそらして上を見上げていく。

眼鏡に月光があたり、鈍く光って和葉からはその奥の表情が読み取ることができなかった。

しばらくそうして無言で夜空を見上げていたが、やがて長く息を吐くと、決心したように言った。

明智：「私は……………」

私は……………すみません、私はあなたを好きになってはいけない人なんです。」

スローモーションのような時が流れる。

ゆっくりと和葉の手から、開いたままの黄色の傘が落ちる。

傘は雪の残った地面に落ち、軽い音を立てて2、3度バウンドして、止まった。

和葉：「…………。せやね。明智君やったら、アタシなんかより、もつとええ人、見つかるよね。」

…………ごめんな、へんなこと聞いて。」

慌てるでもなく、ただ、静かに静かに、諭すように言った。目はまだ宙を見たままだった。

明智：「いえ、遠山さん。私はあなたを幸せにすることは絶対にできないんです。」

…理由は聞かないください。…ですから、私が、あなたを好きになつてはいけないんです。」

それに…………いえ、なんでもありません。」

月明かりを受けて少し目の辺りを光らせたまま、和葉は無理に笑顔を作ってみせた。

和葉：「ええよ、そんなムリせんで。この3日間、めっちゃ楽しかった。」

…………じゃあアタシ、コナン君と蘭ちゃん見に行ってくるわ。…………じゃあね、明智君。」

そう言い残すと、明智に背を見せて、街のほうへ走り出した。

和葉は一度も後ろを振り返らないまま、あつという間に後姿が小さくなってゆく。

明智：「（それに…………あなたは気づいているはずですよ。あなたが本当に大切に思っている人は、あなたを本当に幸せにできる人が誰なのかね。）」

和葉が消えていった方をいつまでも見送っていた明智に、

平次：「なあ、明智。」

後ろから服部の声がかかる。

明智：「ああ、服部。いつからそこに？」

平次はその質問には答えなかった。

平次：「明智、ほんまに行つてまうんか？」

明智：「はい、朝までにはあつちに着いてないといけないんで。それより、キッドはどうなりました？」

平次：「ああ…もう一步のところで逃げられてもったわ。すまんかったな。」

しばらく間が空いた。お互いに言い出せないことが、渦を巻くように心の中を駆け巡っていた。

先に明智が自分の未練に終止符を打った。

明智：「そうでしたか…それは残念でしたね。 そろそろ行きますね。じゃあ、さようなら。」

平次に背を向ける。

まだうつすらと白い地面を進むことに、一歩一歩彼との距離が広がってゆく。

しばらく行くと、後ろから呼び止められた…意外な一言で。

平次：「なあ…おまえ、ほんと誰なんや？」

明智の足が止まる。ただ、振り向いてはいない。

明智：「……やっぱり気づいていましたか。」

平次：「当たり前や。これでも西の名探偵やぞ。」

振り向きもせず、なるべくいつもと同じ声で答えようと思った。

明智：「分かりました。工藤さんにもばれたことだし、服部にも教えましょう。私は……。」

言いかけた明智の言葉を遮るように服部が口を開く。

平次：「やっぱええわ。」

平次：「おまえがたとえどんなやつでも……おまえはオレの親友や。それだけは変わらへん。」

平次には、明智の背中が急に、少し小さくなって見えた。

明智：「服部……。」

平次：「行く前に一つだけ聞いてええか？おまえ、本当に和葉のこ
と、嫌いやったんか？」

明智：「違いますよ。もし私が期待を持たせるような返事をしたな
ら、あの人はずっと私のことを待ち続ける…純粹すぎるくらいの人
ですから…。」

『明智』はもうすぐ死ぬんです。もう二度と姿を見せることはありません。

決して現れることのない人を待ち続ける…そんな思いをさせたくな
いんです。」

そこまで言うのと、ようやく振り返り、見慣れた笑顔を浮かべた。
…いつもの悪戯っぽいような笑顔の下に、どこか寂しげな表情を隠し
て。

「…と言いたいところですが、実は、ふられたのは私のほう
なんですよ。

服部は少し離れていたから気づかなかったとおもいますが、彼女の
顔にははつきりと書いてありましたよ。

『アタシが本当に好きなのは、平次しかおらへん』ってね。

彼女自身は意識していたわけではないでしょうが、仕事から、人の
表情から心の中を読み取るのは得意なんですね。」

明智は不意にかがむと、冷たい地面の上でうつすらと雪をかぶった
黄色い傘を拾い上げた。

平次：「あいつがなあ…。」

遠い目をしながら呟いた。

再び視線を明智に移す。

平次：「じゃあ明智、またどこかで会おうな。」
なるべく明るい声で言った。

空元気でもいい。別れで塞ぎこむのは彼の性に合わない、ただそれだけだった。

明智は傘の雪を払い、畳み終わると、服部に渡す。

きちんと畳まれた黄色の傘を差し出した。白いながらも、温かそうな手をしていた……ように見えた。

明智：「……あの人のこと、頼みますよ。今までどおり側にいてあげてくださいね。」

平次：「おう、まかせときや。」

明智：「じゃあ……今度こそ……さようなら。」

街のほうに急いで走って行く明智。

平次は、なんの音もせず、ただ雪だけがしんと降りしきる月明かりの中、

停止してしまったかのような時の中を、いつまでも、いつまでも立ち尽くしていた。

手に黄色い傘を持ち、明智の消えていった方を見つめながら。

そのとき、急にケータイが鳴った。見るとメールが来ている。明智からだった。

平次：「（なんやろ…あいつからや…。）」

『さっきのメール、送信しといてあげましたからね。じゃあ、お幸せに。』

平次：「へ？」

慌てて送信履歴を見る。一瞬固まった後、みるみる顔が紅潮していった。

平次：「あ・け・ちー！なにしてくれたんや！和葉がなんてゆーか…それにもしオヤジに知られでもしてみい！殺されてまうがな！」

そう叫ぶと、明智の後を追うように平次も街のほうへ駆けていった。

FILE 8 彼は…（後書き）

えっと、一つだけ語句説明を。

文中の<オーモンド・サツカー>ですが、彼は<シェリングフォード>（シェリンフォードという説もあります）の親友にして相棒。シェリングフォードがホームズの決定前の名ですから、彼の相棒と言うと…

もちろん、ジョン・H・ワトソンです。

そのワトソンの決定前の名が、<オーモンド・サツカー>「出来損ないの名探偵」の最大の相棒、というわけでした。

それでは、いよいよラストです…どうぞ！

FILE 9 エピローグ

電気が消え、大きく開いた窓からわずかに月明かりが差し込む室内の中、長い金髪をなびかせながら、一人の女が携帯に向かっている。

白い指がキーの上を踊る。彼女には聞きなれた音がアドレスを刻む。

無駄のない慣れた手つきで文面を紡ぐ。

…長々と打つ必要は無い。彼は全てを知り尽くしているのだから。

『どうだった？』

その一文だけで十分だ。

すぐに返ってきた。いつも通り、5分とかからない。

でも、今日はそのわずかな時間さえ、永遠のように感じられた。

何故なら…結果によっては、『彼』のその後が決定付けられるから…私の期待した、『銀の弾丸』の。

内心を顔に浮かべることなく、ただ機械的に送られてきたメールを開く。

『失敗だよ失敗。別にヤツとはなんの関わりもなかったようだな。』

正直少しホツとした。

でも信じられなかった、あの人が狙いをつけたことが、成功しなかったなんて。

いままで、何一つ上手くいかなかったことなど無かったのに。

『残念だったわね。せつかくあなたにしては珍しく直々に乗り込んでいったのに。』

でもよかったの？ 私みたいに変装して行っただけじゃないんでしょ？』

文面には本心は出さない。いや、表情や言葉にも出ないように細心の注意を払っている。

一瞬の油断は死を意味するから… テキーラやピスコ、カルバドスのように。

『べつに顔が分かったたってたいしたことじゃないさ。直接手を下すのは私の仕事じゃないからな。』

『あら、いつもなら慎重過ぎるくらいなのにえらく強気じゃないま、あなたがそう言うなら大丈夫ね。』

携帯を折りたたみ、タバコに火をつける。

紫煙とともに、一人呟いた… 彼女には珍しく。

「さすがは私が見込んだ彼ね…。」

突然に携帯が静寂を破る電子音を奏でた。

『お前にとにかく言われたくはないよ。あのシェリーをあきらめ

たのはどこの誰だったっけな…。

…言つとくが、あれはお前じゃなきゃ消すところだからな。 R
o t t e n A p p l e 』

なぜか返信をせず、アドレスをまた打ち込んだ。

小気味良いリズムをたて、哀愁を帯びた電子音の音色を奏でる。

…あの、哀愁を帯びた、「七つの子」の旋律を。

『あら、言ってくれるじゃない。私がその、「腐った林檎」なら、
あなたは何なの、ボス。』

明智はとあるビルの電気の消えた一室に一人、孤独に肘掛椅子に腰
掛けていた。

最後に打った文の返信が届く。
うつすらと口元に微笑を浮かべ、携帯を閉じる。

あの質問に答える気はなかった。それでも、一つの言葉が口をつい
て出た。

「……………m i m i c。」

誰もいない空間に、一人話しかけるように喋り始めた。
聞きなれた、穏やかな口調だった。

「m i m i c…。善良な宝箱の振りをして、開けた旅人に絶望を

もたらす魔物…。のはずだったんだがな…。」

静かに目をつぶり、深い思索にふけり始めた。

一つだけ自分にも信じられないことがあった。

それは工藤のことでも服部のことなく、ただ自分自身の行動だった。

…屋上でのあのやり取りに加えて今の会話…組織のことを知っている者は消す、そんな今までのやり方からは考えられないことだ…この一度だけ、感情が理性に勝った…危険なことだ。感情は父が築き上げ、私が守り抜いてきたこの組織を崩壊させかねない代物…しかし、今回だけは…今回だけは…。

自問自答の末、一つの答えに辿り着いた。

芸術家には、その才能を理解してくれる批評家が不可欠である。皮肉なことに、相対するものでありながら…。

自分には、そう言い聞かせた。人を完全に信用することのない彼には、そうするしかなかった。

…本当の答えには、薄々勘付いていながらも…。

目を開くと、徐に座っていた椅子から立ち上がり、ゆっくりとした足取りで大きな窓に歩み寄った。

手にはグラスを抱えていた。

ふう…まさか私まで彼らを見逃すことになるとはね…。

自嘲気味な笑みを浮かべる。

「工藤新一…またいずれ私の前に現れてくれるでしょうね、君ほどの人物ならば。楽しみに待つとしますか。」

「…服部平次…ですか。次に会う時は、銀の弾丸か、それとも…。」

しばらくの沈黙が続いた。強く頭を振ると、顔を挙げた。
…最後に今までの戯曲のヒロインの名を微かに呟いて。

沈みかけた月に向かって軽くグラスを挙げると、一気に飲み干した。
久しぶりの「シルバー・ブレット」だった。

東の空を見上げる

もうとうに雪は止んで、東の空が明るくなってきた。

） 完 ）

FILE 9 エピローグ（後書き）

さて、9回にわたって連載いたしました「M i m i c」完結いたしました！

ここまで読んで下さった皆様、そして管理人様、大変ありがとうございました。

： 思えばこの駄作を書いたきっかけは「もう一人高校生の登場人物が増えたらなあ」でしたが、途中からだいぶ暴走が入って（笑）このような形になりました。

初投稿のため、まだまだ未熟な点多くありましたが、無事に終わることが出来ました。

皆さん、どうも、ありがとうございました！

私の次回作の骨組みは出来上がってはいるのですが、調整のため少々遅れそうです。

皆さんに楽しんでいただければような作品を書きたいと真に願いながら。

それでは、今後ともどうぞよろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0474a/>

Mimic

2010年10月28日06時38分発行